

春の重さ

—

体重計に乗るとき、僕はいつも息を吐いてから乗る。

意味がないことはわかっている。息を吐いたところで数字は変わらない。それでも乗る前に吐く。肺の中の空気くらいは、軽くしておきたいと思うから。

九十八キロ。

今日も同じ数字だった。

朝、シャワーを浴びた後の脱衣所で、僕は少しだけ鏡を見た。少しだけ、というのが正確で、正面からは見ない。斜め、かつ遠め、かつ一瞬だけ。そういう見方を、いつの間にか身につけていた。

身長は百七十センチ。体重九十八キロ。

肩幅はある。背中も厚い。小学校のころ野球をやっていたから、骨格だけはそれなりにできているらしい。ただその骨格の上に、脂肪が乗っている。腹が出て、胸が厚く、首のあたりに肉が寄っている。シャツのボタンは第二ボタンまでは問題ない。第三ボタンで少し引きつれる。

顔立ちは、よく言えば童顔だった。全体的に丸く、目が少し垂れていて、頬に肉がついていて、怒っていてもそんな風には見えないと言われたことがある。得なのか損なのかよくわからなかった。少なくとも、自分では好きではなかった。

中二から吹奏楽部に入った。クラリネットを吹いた。体を動かすことをやめたのは、その頃からだ。やめた理由は、運動が嫌いになったからではない。ただ、集団の中で体を動かすことが、怖くなった。それだけだ。

理由は、今はまだ書かない。

高校生の頃には、僕は自分がゲイかもしれないと、ぼんやり思い始めていた。

ぼんやり、というのが正確で、確信ではなかった。女の子に興味がない、ということはわかっていた。でもそれがゲイを意味するのかどうか、よくわからなかった。そういうことを誰かに相談できる環境に、僕はいなかった。

太っていて、たぶんゲイで、誰にも言えない。

それが僕の、大学一年の春だった。

二

綿貫に初めて会ったのは、大学に入学して初めて行ったサークルの新歓コンパだった。

映画研究会。大きなサークルではなかった。十五人ほどの新歓コンパで、僕はいつものように端の席に座っていた。体が大きいと、自然と端に追いやられる。テーブルの端、部屋の端、集団の端。長年の習慣で、端を探すのが得意になっていた。

綿貫は斜め向かいに座っていた。

最初に気づいたのは、大きさだった。

百七十六センチ、百八キロ。あとで聞いた数字だが、初めて見たときからそのくらいだとわかった。僕より大きかった。でも太っているという印象は不思議となかった。肩が広くて、首が太くて、手が大きかった。柔道かラグビーをやっていたような体だった。実際、両方やっていたと後で知った。

それより目が印象的だった。

あのざわついた居酒屋の中で、ひとりだけ別の時間を生きているような目をしていて。グラスを持ったまま、特に誰とも話さず、壁のあたりをぼんやり見ていた。静かな目だった。怖いわけじゃない。ただ、静かだった。

「おまえ、飲まないの」

気づいたら隣に来ていた。

声をかけられるとは思っていなかったから、少し驚いた。

「飲みます」と言った。「ただ、あんまり得意じゃなくて」

「俺も」

綿貫はウーロン茶のグラスを軽く持ち上げて、僕のグラスにあてた。乾いた音がした。それだけだった。

帰り道、僕はずっとその音のことを考えていた。小さな音だった。なのになぜか、耳の奥に残っていた。

綿貫のことが気になっている、と自覚したのは、その夜布団の中に入ってからだった。気になっている、という感覚が何を意味するのか、そのときはまだよくわからなかった。

三

仲良くなるのに時間はかからなかった。

綿貫は映画が好きだった。古い邦画、七〇年代の ATG 系。増村保造、若松孝二、そういう話ができる人間がサークルにいるとは思っていなかった。

「増村保造は？」と僕が聞いたとき、綿貫は少し目を細めた。

「『盲獣』は怖くて途中で止めた」

「俺も」

笑った。二人で同時に笑って、それからなんとなく黙った。

綿貫は口数が多いほうではなかった。でも話すときはちゃんと話した。僕の話を中心に聞いた。相槌が丁寧だった。体育会系の見た目に反して、押しつけがましいところがなかった。

図書館の帰り、コンビニでコーヒーを買って、公園のベンチに並んで座った。夕方で、空が橙色だった。綿貫が缶コーヒーを飲みながら空を見上げていた。

「なあ」と綿貫が言った。

「うん」

「おまえって、彼女いたことある？」

唐突な質問だった。

「ない」と言った。少し間があった。何かが喉のあたりまで来ていた。「たぶん、そっちに興味がないんだと思う」

言ってしまった、と思った。取り消せないと思った。心臓が痛かった。

「そっちって」

「男が……好きなんだと思う。たぶん」

綿貫は空を見たまま、しばらく何も言わなかった。

「そうか」

それだけだった。責めるでも、驚くでも、引くでもなく。ただ、そうか、と。

風が吹いて、コーヒーマグの湯気が揺れた。

しばらくして綿貫が言った。

「俺も、女には興味ない」

今度は僕が黙る番だった。

「ゲイなの」と聞いた。

「たぶん」と綿貫は言った。「おまえと同じで、たぶん、だけど」

橙色の空が、少しずつ暗くなっていった。

綿貫が缶コーヒーマグを一口飲んで、言った。

「高校のとき、同じ寮にいた後輩がいじめられてた」

唐突な話だった。でも遮れなかった。

「一個下のやつで。体が大きくて、でも全然強なくて。ラグビー部なのに体だけでかくてどんくさいって、上級生にずっとやられてた」

「…うん」

「顔が……なんか、やわらかい感じのやつで。怒れないタイプというか。やられても言い返せなくて、ひとりで抱えてた」

綿貫が少し間を置いた。

「俺、そのとき助けたんだけど。そいつがすごく泣いて。なんか……その顔が、ずっと忘れられなくて」

僕は何も言えなかった。言葉が見つからなかった。ただ、綿貫の横顔を見ていた。

「好きだったのかもしれない、って、最近思う」

夕暮れの中で、綿貫の輪郭が少しぼやけて見えた。大きな体が、その瞬間だけ、少し小さく見えた。

綿貫はそれ以上何も言わなかった。僕も何も聞かなかった。

ただ、なぜか胸の奥が、じんわりと痛かった。その痛みが何なのか、そのときの僕にはまだわからなかった。

四

その夜から、何かが変わった。

距離が縮まったのではなく、綿貫が僕のほうへ少しずつ重心を傾けてくるような感覚があった。

図書館で隣に座るようになった。帰り道が同じでもないのに、一緒に歩くようになった。綿貫が先に帰ろうとしても、なんとなく引き留めるように話しかけてくる。そういうことが続いた。

僕は混乱していた。

大学二年の頃には綿貫のことが好きなのかもしれない、と思い始めていた。でもそれが何を意味するのか、まだうまく整理できなかった。男が好きかもしれない、と言葉にしたことはあった。でも「この人が好きだ」と思ったのは、初めてだった。

ある夜、綿貫の部屋で映画を見ていた。古い DVD で画質が悪くて、二人で狭い画面を覗き込むように見ていた。綿貫の部屋は片付いていた。本棚に柔道の教則本と映画の DVD が並んでいた。似合わない組み合わせだと思った。

気づいたら肩が触れていた。

綿貫が動かなかった。

僕も動けなかった。

映画が終わって、エンドロールが流れて、部屋が少し暗くなった。

「なあ」と綿貫が言った。

「うん」

「さわっていいか」

心臓が止まるかと思った。

「……どこを」と、情けない声で聞いた。

「全部」

五

綿貫は電気を消さなかった。

シャツを脱ごうとしたとき、思わず言った。「電気、消さなくていいの」

「見たい」と言われた。

綿貫の手が僕のシャツのボタンを外し始めた。一つずつ、丁寧に。急がなかった。第三ボタンのあたりで手が止まって、綿貫が少し顔を上げた。

「大丈夫か」

「大丈夫」

嘘ではなかった。怖くはなかった。ただ、恥ずかしかった。自分の体が、明かりの下にさらされることが。

シャツが床に落ちた。

綿貫が黙って、僕の体を見た。腹を見て、胸を見て、腕を見た。値踏みするような目ではなかった。ただ、見ていた。確かめるように。

「ごめん」と言いそうになった。実際、ほとんど言ったと思う。

「謝るな」

先に言われた。静かな声だった。怒っているわけじゃなかった。ただまっすぐで、それが余計に胸に刺さった。

綿貫の手が腹に触れた。

脂肪の乗った、柔らかい部分に。どけなかった。押さなかった。ただ置いた。大きな手だった。温かかった。

「きれいだ」

聞こえなかったふりをしようとした。

「きれいだと思ってる」

もう一度言われた。今度は目を見て言われた。

泣くのをこらえた。なんとかこらえた。

綿貫の唇が首筋に触れた。鎖骨に触れた。胸の、脂肪の乗った厚い部分に触れた。丁寧な、確かめるように、止まらずに。

僕の手が綿貫の背中に回った。シャツ越しに、筋肉の硬さが伝わってきた。

「脱いで」と言った。

自分でも驚くくらい、はっきりした声だった。

綿貫がシャツを脱いだ。広い肩だった。胸板が厚くて、腹にも肉が乗っていた。僕より大きかった。それが、不思議なほど安心した。

「でかいな」と思わず言った。

綿貫が少し笑った。「おまえもな」

笑えた。こんな場面で笑えるとは思っていなかった。

笑いが収まったとき、綿貫が少し顔を近づけてきた。

止まった。

僕の顔のすぐそこで、止まった。

許可を聞いているのだとわかった。言葉じゃなくて、距離で聞いていた。

目を閉じた。

唇が触れた。

やわらかかった。綿貫の体のどこより、唇だけがやわらかかった。短かった。でも確かだった。

離れたとき、自分の息が少し乱れていることに気づいた。

綿貫が僕の頬に手を当てた。親指が頬骨のあたりをゆっくり動いた。

もう一度、唇が来た。

今度は少し長かった。綿貫の手が後頭部に回って、引き寄せた。強くなかった。でも逃がさなかった。

離れたとき、綿貫が小さく息を吐いた。

綿貫が僕の腰に手を回して、引き寄せた。脂肪の乗った腰を、逃がさないように。

「力抜いていい」と言われた。

抜いた。全部、抜いた。

今まで体を縮めるために使っていた力が、全部抜けた気がした。

綿貫の唇が耳元に來た。

「したい」

「ん」と答えた。声が出なくて、「ん」という音とうなずきだけで答えた。

綿貫はゆっくりだった。急かさなかった。何度も僕の顔を見た。大丈夫か、と確かめた。

大丈夫、と言うたびに、綿貫は少し笑った。安心したような、それでいてどこか切ないような笑い方だった。柔道をやってきた人間の、力の使い方を知っている手だった。乱暴じゃなかった。丁寧だった。

最初は痛かった。でも綿貫が止まってくれたから、こらえなくてよかった。

「もう少し待って」と言えた。

「わかった」と言ってくれた。

それだけで、泣きそうになった。

やがて痛みが和らいで、綿貫の重さが僕の上にあった。百八キロの重さが。体温が伝わってきた。綿貫の息が首筋にかかった。

「大丈夫か」

「うん」

「本当に？」

「本当に」

綿貫が動いた。

途中で、綿貫がまた唇を寄せてきた。

今度は深かった。息が混ざった。僕の手が綿貫の首の後ろに回って、引き寄せていた。自分でそうしたのかどうか、よくわからなかった。ただ、離したくなかった。

僕の体が、初めて誰かに受け入れられていた。九十八キロ全部を。脂肪も、重さも、全部ひっくるめて。謝らなくてよかった。縮めなくてよかった。

綿貫が低く息を吐いた。僕の名前を呼んだ。

生まれて初めて、誰かに名前を呼ばれた気がした瞬間だった。

六

終わってから、しばらく二人で天井を見ていた。

綿貫の手が僕の腹の上にあった。どけなかった。

「なあ」と綿貫が言った。

「うん」

「おまえ、自分の体、嫌いだろ」

答えなかった。答えなくても伝わっていた。

「俺は好きだけど」

「……なんで」

「なんでって言われても」

綿貫が少し笑った。

「でかくて、重くて、温かい。抱きしめたとき、ちゃんとそこにいる感じがする」

「気持ち悪くない？」と聞いた。

「何が」

「こういう体」

綿貫が黙った。少し間があって、それから言った。

「俺がいいと思ってるのに、おまえがそれを否定するのは、なんか悲しいよ」

怒っているわけじゃなかった。ただ、真剣だった。

その言い方が、思いがけなかった。

悲しい、という言葉が。責めるでも諭すでもなく、ただ悲しい、と言われた。

何も言えなかった。言葉が見つからなかった。

しばらく黙っていた。天井を見ながら、綿貫の言葉を何度か頭の中で繰り返した。

「……綿貫って、柔道やってたんだよね」と、関係ない話をした。

「中学と今も」

「今も？ 大学でも？」

「柔道部」

「強いの」

「まあまあ」

「ラグビーも？」

「高校だけ。寮で強制的に」

「え、強制？」

「そう。入学したら決まってた」綿貫が少し笑った。「最初は嫌だったけど、やってみたら悪くなかった」

「へえ」

「おまえは吹奏楽だっけ」

「うん。クラリネット」

「似合わない」

「よく言われる」

二人で笑った。

脱力した笑いだった。でも、その笑いの中に、さっきの綿貫の言葉がまだ残っていた。
なんか悲しいよ、という言葉が。

笑いが収まって、部屋が静かになった。

綿貫の手が、まだ僕の腹の上にあった。

「翔太」

声に出してから、自分でも驚いた。ずっと綿貫、と呼んでいたのに。

綿貫が少し動いた。顔をこちらに向けた。

「なに」

「……なんでもない」

「なんでもないって顔じゃないけど」

「ほんとになんでもない」

綿貫が少し笑った。

「また名前と呼んでよ」

それだけ言って、また天井を向いた。

僕は返事をしなかった。でも、心の中で何度も繰り返した。翔太、翔太、翔太。

声に出したのは、その夜一度きりだった。でもその一度が、何かを変えた気がした。

少しだけ。ほんの少しだけ、自分の体を責める声が、静かになった気がした。

七

それが一度きりだったのは、どちらのせいでもなかった。

大学を卒業する年、翔太は地方の会社に就職が決まった。僕はまだ大学に残った。続けようとも、遠距離をしようとも、言えなかった。翔太も言わなかった。

続けたとして、どうなるのか。籍も入れられない。家族に紹介もできない。そういうことを、言葉にする前に諦めていた。諦め方を、僕はずっと前から知っていた。

最後に会ったのは、また桜の季節だった。

駅のホームで、翔太は大きなスーツケースを持っていた。

「元気でな」と言われた。

「うん」と言った。

新幹線が来て、翔太が乗って、ドアが閉まった。窓越しに一度だけ目が合った。翔太は何か言いそうな顔をしていた。でも新幹線は動いて、その顔はすぐに見えなくなった。

ホームに一人残って、僕は少しだけ泣いた。

人がいたけど、泣いた。

子供みたいに、と自分でも思った。でも止まらなかった。

翔太、ともう一度だけ心の中で呼んだ。

声には出なかった。

八

あれから七年が経つ。

体重は今も九十八キロ前後だ。体重計に乗るとき、今も息を吐いてから乗る。

ゲイであることは、今も誰にも言っていない。職場では「彼女いないの？」と聞かれるたびに「縁がなくて」と答える。その言葉の滑らかさに、自分でも少し驚く。

翔太とは、あれから一度も LINE をしていない。連絡先は消していない。消せなかっただけかもしれない。

桜が散る頃、僕はいつも翔太のことを思い出す。

電気をつけたまま、謝るな、と言われたことを。きれいだと思ってる、と言われたことを。なんか悲しいよ、と言われたことを。

そして、また名前と呼んでよ、と言われたことを。

風呂上がりに鏡を見ると、まだ少し目を細める。正面からは見ない。

でも、以前よりほんの少しだけ、鏡の前に立ってられる時間が長くなった。

それが翔太のおかげなのかどうかは、わからない。

ただ、あの夜、僕の体は誰かに丁寧に扱われた。九十八キロ全部を。それは確かにあった。

桜が散るたびに、思い出す。

体重計に乗る。今日も息を吐く。

数字は変わらない。でも、吐いた息の意味が、少しだけ変わってきているような気がする。

了